

## 私の研究マインド

本学の先生に研究の意味やそこに至る道筋などを語っていただきました

みむら としひで  
医学部教授 三村 俊英 (大学病院リウマチ膠原病科)

私の医者人生を俯瞰して私の研究マインドがどのように醸成されて来たかをお伝えします。

医学部時代から優れた臨床医になりたいと考えていた私は、大学卒業直後に、虎の門病院で初期臨床研修を開始しました。卒業大学で臨床研修を行うことが当然であった時代でした。濃密な臨床経験を通して3年目に自分には研究の経験も必要なのだと思います、4年目に縁あって東京大学医学部第3内科に学部研究生として研究の場をいただきました。研究マインドは不十分で研究生活に慣れずに呆然として半年ほどが過ぎた頃に、隣の研究室のチーフの先生からアメリカ留学のお誘いを受けました。研究室のボスからもOKの返事をいただけたので、無謀にも研究の業績も皆無のまま卒業5年目にポスドクフェローとしてノースカロライナ大学チャペルヒル校リウマチ免疫内科に留学。そこで、初めて自分の頭で考えながら世界の競合者に負けないように研究を進める精神が芽生えました。途中から研究助教授に任じてもらい4年間研究生活に没頭しました。全身性エリテマトーデス患者血清中の病原性新規抗リンパ球抗体の探索を行い、CD45分子が求める抗体の標的であることを示すことができました(T. Mimura, et al. J. Exp Med. 1990. 172(2):653-6に掲載)。自分の想像した通りの結果が見えた瞬間の鳥肌が立つような興奮は今でも忘れられません。この成果は教科書にも掲載され、私の研究マインドは大いに鼓舞されました。東大に戻り、臨

床と研究の両方を高度に要求される中で更に研究マインドが養われていきました。2002年には当時のボスから埼玉医科大学リウマチ膠原病科准教授として赴任しないかと打診され、大変な重責と覚悟して引き受けました。ここでは、臨床と研究を軌道に乗せる必要性を感じ、丸木清浩名誉理事長のご配慮で研究室と実験機器を整備することが出来ました。この時には、目の前が明るく開けたと感じ、このご恩を医学の発展や患者さんの幸せを通してお返ししようと心に誓いました。2年後には教授となり、講座に参加してくれる若手も少しずつ増え、私の考える研究マインドを理解し、更に前に進めてくれる強力な仲間達の手もあり、当科オリジナルで重要性の高い研究を行えるようになりました。新プロジェクトも始動中です。当科では、研究の経験を有する医師達は、広い視野と科学的思考で診療においても多大な貢献をしています。臨床研修が必修化され、世間を賑わした専門医制度が優先される現在、世間のみならず医師の中でも医学研究という意識が薄れてきているのではないかと大変危惧しています。医学、医療においては、温かい心と確かな技術、そして科学力の3つが必須なことは言うまでもありません。科学力は研究で養われます。研究を始める時期はいつでも大丈夫。初めは取っ付きにくく感じても、徐々に興味が湧き研究マインドが養われます。長い医者人生のひと時を研究の世界で過ごしてみませんか。